

# 桜花会 同窓会誌

---



本年度末の竣工に向けて新棟の建設が着々と進行中。  
(本館と南1号館の間)



大岡山駅前がすっかりリニューアルされました (地下は駐輪場になっています)

---

2008年9月発行

# 桜花会 同窓会誌 目次

■ 巻頭言	桜花会会長 古川 昌彦	2
■ 異動教員から		
南一号館の思い出	脇原 将孝	3
東北大学へ転出しました	土井 隆行	4
■ 新任教員挨拶		
	高尾 俊郎	6
	田中 浩士	7
	伊藤 繁和	8
	望月 大	9
	布施 新一郎	11
■ 研究室紹介	三上・伊藤研究室	12
■ 卒業生から		
「世界一のものづくり大国日本！」を本当に実現したい！！		
	田中 公章	13
ポスドク生活を振り返って	守谷 誠	14
■ 同窓会報告		
昭和42年理工学部卒業生同期会報告	藤井 靖彦	16
■ 最近の大学から		
21世紀COEに引き続きGlobal COEに参画	碓屋 隆雄	18
「米百俵」の使い方	桑田 繁樹	20
■ 桜花会賞受賞者の声		21
■ 桜花会総会・工大祭企画のご案内		26
■ 会員の声		27

## 企業説明会にご協力いただける企業を募集しています！

10月25日(土)の桜花会工大祭企画にて、本年度も在校生向けの会社説明会を開催いたします。ご興味のある方は、事務局までどうぞお気軽にお問い合わせ下さい。

## 巻頭言

桜花会会長 古川 昌彦

世界の経済が変調となっています。米国の住宅バブルの崩壊は従来 of 危機とは一線を画すようにも思えます。1つには金融技術を過信したツケが表面化した点でしょう。質の低いローンを束ねて証券にした商品が世界の投資家に拡散し、損失の全体像が掴みづらく、当局は経験のない危機対応に苦しんでいるようにみえます。この米国発の金融・信用不安が全世界に及び株式市場は暴落し、だぶついたマネーは新興国の需要拡大が見込まれる商品市場に向かい、特に原油等の資源や食料が異常な高騰を呈しています。特に食料自給率が低く、エネルギー資源を持たず輸入に依存し、かつ高齢化が急速に進む日本にとっては賃金は上がり物価が急上昇することで国民生活を直撃し、辛い時代に突入したと思います。当面の様々な対策は必要に応じて打ち出されるでしょうが、基本的には科学技術を始め様々の分野で「知」を創造し、「知」を高め集積し、それを国の武器として世界の資金を呼び込める力を持つ国となることが何よりも重要になると思います。その中心となるのは、勿論、大学ですから、大学の役割は大変重いものになりますし、それが出来る大学のみが生き残れるでしょう。当然、母校東京工業大学も重要な一翼を担う大学でしょう。歴代学長のご努力もあり、また大学法人化以降もそのことを共通の目標として大学当局も大変努力されていると思います。一義的には大学のご努力に負うところ大ですが、国としての力を高めるためには産業界との協力、他の知との融合、更には優秀な学生の誘致や実践的な教育等々、様々なサブシステムが必要となるでしょう。この部分で大きな力となりうるのは様々の分野で指導的あるいは中核的立場にある卒業生の方々であると思います。それぞれのお立場で可能な限り母校を応援するという心構え、体制が必要であります。蔵前工業会も桜花会も、多くの方に参加願って大学を守り立てる努力を続け、東京工業大学が創出した「知」によって世界のマネーを日本に呼び込む拠点となることを目指しましょう。

## 異動教員から

昨年度に応用化学専攻から異動された脇原先生、土井先生のお二人から、東工大を去るにあたってのメッセージやご近況などをいただきました。専攻の教育研究にご尽力されてきた両先生には応用化学専攻一同、心から感謝するとともに、新天地でのご活躍をお祈りしております。

### ■ 南一号館の思い出

#### 脇原 将孝（東京工業大学名誉教授）

私は昭和46年3月に東工大大学院化学専攻博士課程（指導教官 桂 敬先生）を修了し、同年4月から現在の応用化学専攻（当時の工学部合成化学科）の助手として谷口雅男先生（現東工大名誉教授）のもとで研究と教育に携わり、本年3月末日をもって定年退職し名誉教授の称号を賜りました。米国シカゴ大学留学の1年半を含めて実に37年間にわたり南一号館に籍を置きました。工学部助手として働き始めた当初はコツコツ勉学に励む理学部学生と表面的には学習時間の少ない工学部学生の気質の違いに戸惑うこともありましたが、1～2年が経過しますと工系の学生諸君の行動や知識の幅の広さに感嘆することが多くなりました。

研究のスタートは谷口先生との二人三脚で酸素、硫黄の分圧制御下での遷移金属酸化物や硫化物の相平衡でした。このような研究には粉末X線回折装置が必須なのですが、当時は東工大の中でも極めて限定された研究室のみが保有する状態でした。私どもは無機材料工学科の当時の岩井・小坂研究室のものを借用させていただきました。日本のGDPの増加とともにやがて谷口研究室の予算も上昇し、X線回折装置を理学電機から購入できたときの充実感は忘れることができません。昭和57年には谷口先生のもとで助教授に昇任しましたが、これを機にもう少し応用研究も手掛けることにしました。その時はクラスター硫化物の一種であるシェブレ相を合成し、構造解析等を行っていたので、このシェブレ相硫化物をリチウム二次電池の正極活物質とする試みをスタートさせました。リチウム二次電池（リチウムイオン電池）は今でこそ世の中に認知されていますが、当時この分野の研究者の数は限定されていました。（リチウムイオン電池は1991年に日本で実用化されました）谷口先生のご退官にともない平成元年（1989年）に教授に昇任した後は、研究面ではさらにリチウム二次電池用電極・電解質材料の研究開発をすすめ、最近の環境・エネルギー問題との絡みから、おかげさまで順風の中で定年を迎えることができました。谷口・脇原研OBは約170名にのぼり、この間多くの優秀な学生諸君と

ともに研究の苦楽を味わうことができたことは私にとって大きな幸せです。

南一号館はようやく改修されることになりましたが、欧米の立派な大学の建物に比較し、多くの日本の大学の建物はきわめて貧弱であり、南一号館も例外ではなく約40年余りで“消滅”することになります。大学が伝統の上に立ってさらに発展する精神を支え、包み込む今度の建物が100年たっても残る南一号館であってほしいと願っています。

10年余り前に再出発しました新生“桜花会”も平成13年には「桜花会教育奨励賞」を作ることができました。これは初代横山亮次会長やOBの宮坂、堀尾、露木の各氏らのご努力によるものであり、当時応化コース主任としてお手伝いできたことが印象深く心に残っております。卒業生にとりましては研究室や専攻のOB会はある意味で心の支えでもあり、年とともにそれは増してまいります。桜花会が今後益々発展されることを祈念いたします。

## ■ ■ 東北大学へ転出しました

土井 隆行（東北大学大学院薬学研究科・教授）

この度、平成20年3月31日をもちまして東京工業大学を退職いたしました。1982年4月に第三類に入学して以来、約25年間を東京工業大学でお世話になりました。ここに厚く御礼申し上げます。

東工大への入学とともに生家のある岡山を離れ、大岡山の下宿で銭湯に通いながらの一人暮らしを始めました。2年次から化学工学科に所属し、化学工学と有機化学を学びつつ、だんだんと有機合成化学に惹かれ4年次に辻・山本研究室に所属しました。天然物合成という何年間もかけて一つの化合物をつくるという途方もない研究テーマに何度もくじけそうになりましたが、諸先輩や他の研究室の同期の友達にも励まされながら卒業することができました。そのまま修士課程、博士課程へと進学し、博士取得後には留学の機会をもらいました。アメリカのコロンビア大学化学科 Gilbert Stork 先生のもとで2年半の留学生活を送った後、化学工学科に助手として採用されました。中森先生のご指導のもと学生実験のセッティングから始めて、山本經二先生のもとで遷移金属触媒を使った有機合成の研究を行いました。山本先生のご退官後は高橋孝志先生のもとで、特にコンビナトリアル化学を基盤とした天然物合成を行い、生理活性化化合物の探索研究を展開して参りました。

思い起こしますと研究生生活のモットーは「あきらめないで努力すること」「なんとかなると思って信じて道を探すこと」だったと思います。東工大では周りの方々の心温かい叱咤激励に支えられ、やって参りました。一からご指導くださった諸先生、事務の方々にはたいへんありがたいと感謝しております。また SciFinder を導入時には化学・工学・材料・生命系の全研究室に希望調査を行い、

多くの研究室からの支持をいただきました。その後工学部で予算をつけてもらい、図書館への導入を経て全学でデータベースとして利用されていることをたいへん嬉しく思います。

野球選手のイチロー、将棋棋士の羽生善治名人など独自の世界を創って突き進んでいく姿はたいへん魅力に満ちております。自分のワールドを創るべくこれまで以上に皆様方と活発なディスカッションしてゆきたいと望んでおります。薬学研究科という新しい場所に参りました。新天地でも私が東工大で学んだことを活かして学生さんの教育研究指導を行い、世界に羽ばたく科学者を育成していきたいと思っております。桜花会の皆様にはご指導ご鞭撻を頂戴することになると思いますが、これからもどうぞ宜しくお願い申し上げます。

なお、応用化学専攻のご配慮で連携教授として任命いただきましたので、暫くの間引き続きお世話になります。

## 新任教員挨拶

### ■ ■ 高尾 俊郎 准教授 (2008年2月着任)

2月1日に応用化学専攻反応設計化学講座 鈴木(寛)研究室の准教授に着任いたしました高尾です。1999年の8月に同研究室の助手として着任し、鈴木教授のもとで有機金属化学、とくにクラスター化合物の化学の研究に携わってまいりました。クラスター化合物とは分子内に複数の遷移金属をもつ新しいタイプの化合物であり、クラスターを用いることで、窒素や炭酸ガス、アルカンといった安定で資源としては殆ど利用できなかった物質を有用な化合物に変換するプロセスの開発を目指しております。鈴木教授には大学院時代から公私にわたって長い間お世話になっております。

学部は有機材料工学科の卒業であり、大学院進学の際に総合理工学研究科化学環境工学専攻(現化学環境学専攻)の鈴木助教授(当時)の研究室への配属となりました。大岡山から長津田キャンパスへの移動、また高分子合成から有機金属化学への専門分野の変化と、自分を取り巻く環境が変化した時期でありました。「企業に入ったら高分子の研究が主体になるのだろうか」と何となく考え、「修士の間は別のことでもやってみるか」と長津田行きを決意した記憶があります。そんな簡単な気持ちで大学院進学を決めたのですが、博士課程修了までの5年間を鈴木研究室で過ごすこととなりました。時期としましてはバブル時代の最後にあたります。博士課程修了後、三井東圧化学へ入社いたしました。が、修士卒業で入社しますと同期が140人いたのですが、僅か3年で同期が40人と大幅に減っておりました。世間では私達の世代を「バブルドクター」と呼んだりもしますが、その3年間でバブルがはじけ、日本経済ならびに博士課程卒業後の学生を取り巻く環境が著しく変化いたしました。三井東圧化学に入社した後も1996年に三井石油化学との合併による三井化学の誕生と、またまた大きな変革が起こり、その3年後には自分自身が転職するなど落ち着かない日々を送っておりました。大学に戻れば落ち着くのかなと思っていましたが、国立大学の独立行政法人化が待ち受けておりました。個人レベルでは、この時期に長男の誕生といった一大イベントがあり、私生活の上でも大きな変化が訪れました。

こうして振り返ってみますと、なかなかビジョン通りに進んできたとは言いがたいのですが、色々な所を渡り歩いてきたなと思います。結果的には、これこそが自分の財産であり、様々な場所・立場での見方、考え方を経験することで現在の自分が作られてきたのかなと感じております。ただ、環境の変化はスピードを緩めることはなく、さらに加速しているような気がします。自分を変え

る事を拒むわけではないのですが、こうした状況だからこそ外部環境の変化に惑わされることなく、自分自身の「コア技術＝クラスター化学」を大事にしながら研究を進めていきたいと考えております。自分の研究を進める中でも状況は日毎に変化しますが、その都度、「自分は何をしたかったのか」「何のために大学に戻ってきたのか」という初心に立ち返り、自問自答しながら「芯」のある研究を積み上げていきたいと考えております。

今後は講義を担当しなければならない、という変化が自分の生活に降りかかってくる。これは助教の時にはなかった仕事で、責任の重さを考えると身震いが止まりません。学部の講義としては2年生の無機化学を担当することになります。周期表の各元素について語るという難しそうな講義です。手探りの状況でのスタートとなりますが、化学の奥深さを伝えるにはもってこいの題材だと思っております。有機材料工学科、化学環境学専攻、応用化学専攻、そして企業と様々な場所で積んできた経験を活かして、学生諸君には元素の多様性、さらには多様なものの見方の重要性を伝えていきたいと考えております。

さて、変化のついでですが、南1号館の改装がいよいよ現実のものとして迫ってまいりました。桜花会の皆様には現在の南1号館の見納めついでに5階の鈴木・高尾研にお越しいただき、ご指導いただけると幸いです。今後ともよろしく願いいたします。

#### ■ ■ 田中 浩士 准教授 (2008年5月着任)

5月1日付けで、高橋研究室の准教授として昇任させていただきました田中浩士と申します。よろしく願い致します。愛媛県越智郡生名村という瀬戸内海の小さな島から夢と希望をもって上京、1987年に東工大に入学しました。その後、1996年に高橋孝志先生の御指導のもと博士課程を修了、1996年から1999年住友製薬株式会社で創薬研究の現場で働く機会を得ました。その後、ご縁がありまして、東工大に戻る機会を得まして、1999年から2001年まではポスドクとして、2001年から助手(現助教)を務めさせていただき、現在に至っております。

小さい頃から「何かを作る」という行為には、とても楽しかった思い出があります。小学校の頃はプラモデルが大好きでした。そんな私が東京工業大学に入学し、高橋孝志先生に卒業研究の御指導をいただきました。これが、有機合成と私との出会いです。卒業研究より博士論文まで一貫して「理論計算を用いるエンジン系DNA切断分子の設計と合成とその評価」に関わる研究を行なわせていただきました。合成した化合物の評価は、京都大学の杉浦幸雄先生のもとで行なっていただきました。寝る間を惜しんで合成した化合物を娘の様に思いながら協同研究者のもとに送った結果に一喜一憂したことは、いまでもい



思い出であり、その中で、いろいろなことを学ばせていただきました。また、当時、ゼミは、山本經二先生のグループと一緒にこなっておりました。高橋先生には、「動」の研究を教えてくださいましたが、山本先生には、「静」の研究を教えてくださいました。研究が行き詰まった時に、自分を俯瞰するように見つめ直すことの大事さは、山本先生から教わったと思います。博士課程修了後、住友製薬株式会社に就職し、創薬研究に携わりました。物質生産の現場に身を置くことで「教育」ということの重要性を身を以て感じました。このことも大学にもどることにした大きな理由の一つであります。

大学に戻りまして、助教では、高橋先生が推進されているコンビナトリアル化学を中心に研究を行ないました。個人的には特に糖の化学に興味を持ち研究を深めました。高橋研究室では、山田晴夫先生（現東京理科大学教授）が糖化学の立ち上げにご尽力されておりました。皆様ご存知と思いますが、20年くらいまえまでは、糖の科学といえば、東工大はそのメッカでありました。当時の理学部を中心に多くの先生が糖化学を行なっておられました。しかし、現在は、その様相は一変しております。「糖化学はもう終わった化学である。」と思われているのか多くの合成研究者が糖化学から離れて行きました。もう、東工大には、糖化学を看板に挙げている研究室や先生はほとんど残っておられません。しかし、まだまだ、糖の化学の中には、わからないこと、自由にできないことが多く残っております。わたしは、「ネオ糖質化学」と題して、もう一度、糖鎖化学を現代化学を基準に見直し、さらに、新しい糖鎖工学や、糖化学生物学へと発展させていただきたいと思っております。

また、助教の時には、学生にとっても恵まれました。高橋先生のもとに集まる学生は非常に優秀だったからです。また、土井隆行先生（現東北大学教授）にも、教育や研究について多くのことを学ばせていただきました。6年間で7名の博士課程の修了を見送ることができ、そのうち、4名は、現在東工大以外の大学の助教として活躍しております。准教授にさせていただいた今後も、学生に科学のおもしろさ、研究の楽しさを伝えることで、できるだけ多くの桜花会のDNAを持った人材を、日本や世界に送り出していけるよう努力して行きたいと思っております。最期になりましたが、東工大の諸先輩方が作り上げてきたすばらしい伝統をけがすことなく新しいページを付け足していけるよう尽力していきたいと思っておりますので、今後とも御指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

■ ■ 伊藤 繁和 准教授 (2008年8月着任)

8月1日付けで着任致しました、伊藤繁和と申します。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

昨年度、前任地でありました東北大学理学部化学教室では、メインの建物の耐震補強工事がありまして、研究室が一時的に避難しておりました。研究室の負の遺産の整理、たくさんの荷物の移動、少々手狭なスペースでの実験などの困難を乗り越えまして、本年4月、工事が完了し、新しくスタイリッシュになった実験室での生活が始まりました。工事の効果を検証するには絶好のタイミングで、早速大きな地震が二度もやってきましたが、幸いにも大きな被害はありませんでした。この度、折角きれいになった実験室から離れることになり、はじめは少々複雑な感情がありましたが、次第に、こちらのレトロで頑強な本館建物で研究を行うことができるという喜びが増してきて、また優秀な人材の育成と高いレベルの研究展開を進めることへの使命感にあふれるようになっております。

東北大時代には、現在アラバマ大学客員教授でおられる、吉藤正明先生に薫陶を受けました。吉藤先生は、低配位リン化合物の化学を開拓し、有機典型元素化学の源をつくっておられる研究者です。私は、安定化されたリンの多重結合を合成素子として捉えることによってエキゾチックな含リン有機化合物を創製するという、実用性を度外視したような典型的理学研究を行っておりました。その一方で、吉藤先生の研究室には有機伝導体をテーマとするグループもあり、電気化学測定や物性評価について先輩や後輩から数々教えて頂き、また、特異なリン化合物を配位子とした均一系錯体触媒の開発にも取り組んでおりました。

この度、東工大にて三上幸一先生と共に研究室を運営して行くことになりました。三上先生は不斉有機合成や生理活性物質の合成を中心とした研究を展開し、国内外で高い評価を得ておられる研究者であります。同研究室の助教相川光介博士は気鋭の若手有機合成研究者でおられます。また私が東北大時代に大変お世話になりました寺田眞浩先生を輩出している研究室でもあります。素晴らしい伝統をもつ研究室の新たな一員となるということで、大変な責任を感じておりますが、同時に、これからの新しい生活に大きな希望を抱いているところであります。

今後は、高安定性一重項ピラジカル分子構造および関連分子系を鍵とする機能性有機材料の開発、低配位ホスフィン類を利用する有機合成触媒の開発、核スピンを用いる量子情報制御、を中心とした、次世代科学技術創出を目指す研究を進めて参ります。これまでの理学的研究を踏まえ、真に実用的な新しい物質の開発を目指し、日々精進に励みたいと思っております。

#### ■ ■ 望月 大 助教 (2007年10月着任)

私は、早稲田大学で博士課程を平成18年3月に修了し、同大学で博士研究員として1年半の間、研究を行った後、昨年10月より東京工業大学に助教として

着任いたしました。東京工業大学応用化学専攻で和田雄二教授が主宰する研究室にて学部生・大学院生の指導と研究に従事しております。私にとって、物理化学・触媒化学分野は、新たな研究分野ということになりますが、よろしくお願い致します。

和田研究室は、和田先生が昨年4月に異動され研究室ができたばかりということもあり、修士学生3名・学部学生2名という少数精鋭で研究を行っております。早稲田大学では、およそ30人の学生とともに研究をしてきたので、はじめは研究室の人数の違いに戸惑いましたが、研究指導の基本的な手法は一緒であると考えられるようになってきました。その点では、博士研究員時代に、21COEプログラムの若手研究者育成の一環として、学生の研究指導の一部に従事させていただいた経験が現在とても役に立っていると感じております。また、和田先生の異動直後の時期に私も異動したことから、研究室の立ち上げといった貴重な機会を経験でき、忙しいながらも、とても充実した日々を過ごせています。研究室の色が付いていない学生のフレッシュな研究意欲を延ばすとともに、和田研究室の特色を出せていけるよう微力ながら和田先生と頑張っております。

研究面において、私は学生・博士研究員時代と早稲田大学、黒田一幸教授の指導のもと、層状ケイ酸塩を利用したシリカ系ナノ材料の創製に係る研究を行ってまいりました。学部生として研究室に配属された時に頂いた研究テーマをおおよそ7年間継続したことになります。黒田先生の指導の中で、様々なナノ構造作成技術を合理的に作り上げる手法を身につけることができました。今後は、これまでのナノ構造作成技術を生かしつつ、和田先生の研究方針の一つであるナノハイブリッド材料の応用を意識した研究を行っていきたいと思っております。

ナノハイブリッド材料は、その豊富な組み合わせと新奇機能性の発現の可能性から多くの研究がなされている分野の一つであります。たとえば、無機物質の機械的・熱的に優れた物性と有機物の多様な構造・機能性とを組み合わせることにより、双方の優れた部分を併せ持つといった特長をもつことが可能となります。最近では、ナノ構造制御技術の進歩により、ナノメートルレベルの規則性を保持しながら、分子レベルからマイクロメートルのスケールに渡って制御可能となるなど、目覚ましい進展が図られております。和田研究室では、これまでにゼオライトと種々の色素とのナノハイブリッド化に着手し、自在な発光色を呈することに成功しております。このような材料に関して、今後触媒分野での応用を検討していくことはもちろんのこと、エネルギー、光学や生体など様々な分野やそれらと触媒との融合領域で研究を進めていきたいと考えております。

最後となりましたが、研究者・教育者としてスタートしたばかりですが、桜花会の皆様から暖かく厳しいご指導・ご鞭撻をいただけると幸いです。

■ ■ 布施 新一郎 助教 (2008年3月着任)

今年3月1日に助教として着任いたしました布施新一郎です。今度ともどうぞよろしく願い申し上げます。私は応用化学専攻の高橋孝志教授、土井隆行助教授(現東北大学教授)のご指導のもと、2005年3月に学位を取得いたしました。高橋・土井研究室では合成ロボットを使って抗癌剤タキソールの全合成をせよとの挑戦的な課題をいただき、普通の合成化学の研究室ではまず縁のない合成ロボット開発に取り組みました。共同研究者に教を乞いつつ、中学の技術家庭科以来となるはんだづけに四苦八苦したり、苦手なソフトウェア作成をお手伝いしたりと、貴重な経験の連続でした。研究室のロボットの前で力尽き、何度もそのまま朝を迎えたことが昨日のこのように思い出されます。

無事タキソールの仕事に区切りがつき、卒業後、高橋教授が創設した東工大公認ベンチャー企業のケムジェネシス社に一年間研究員としてお世話になりました。ここでは大学生活で全く気にもとめていなかったコスト意識の大切さ、顧客とのやりとりの仕方、契約から対価を受領するまでのプロセスなど、多くのことを学ばせていただきました。まだ独身でしたので、会社の先輩や同僚と連日飲み屋さんで繰り出し、昼には聞くことのできない大事なお話を聴けたのは今の私にとっても大きな財産となっています。

2006年5月からは高橋教授の紹介で、念願だった海外留学をさせていただくことになり、米国ハーバード大学のダニエル・カーン教授のもとで博士研究員として働きました。7カ国から集まった優秀な大学院生達は筋金入りの個性派集団でしたが、一緒にいてとても気持ちの良い面々で、お陰様で研究にもパーティーにも手抜きなく取り組むことができました。言語も文化も全く異なる地でお仕事をさせていただき、信頼できる友人を得られたことは非常に幸せでした。

幸運にも今春から、3年ぶりに出身研究室である高橋・土井研究室(現高橋・田中)に助教として着任し、研究スピードの速さ、学生の真剣さにはあらためて少々驚かされました。同時に一学生としてではなく、責任ある研究室のスタッフとして今この場にいることに非常に身の引き締まる思いがしております。研究室、専攻、ひいては大学をめぐる環境は急激に変化し続け、社会から求められるものも大きくなっている中で、今自分ができるとは何かと、日々自問自答しております。学生を指導するというより、いつも一緒になって悩んで喜んで苦しんで(しかも頻りに学生から教えられる)といった状態ですが、悔いのないよう自己の最善を尽くし、研究、教育両面で、少しでも多く貢献できればと

願っております。

慣れないことばかりで、周囲のお世話になってばかりではありますが、温かく見守っていただけますと幸いです。また今後ともご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

## 研究室紹介（三上・伊藤研究室）



三上



伊藤



相川



滝山

最も古く、最も頑強な本館に引っ越し、この度、准教授に気鋭の若手研究者伊藤繁和先生、秘書に滝山裕美子さんを迎えました。今年からスタートした本学化学系の国際交流の第1号としてケンブリッジ大学 Steven Ley 研で夏季研究に従事している相川光介助教と研究室のスタッフをフルに整えて新たなスタートを切ります。伊藤先生を迎え、機能性有機材料の開発、低配位ホスフィン配位子の Chirality 制御に基づく不斉触媒の開発、フッ素核の活用などフッ素化学の物理化学的な側面の追求等、研究室として下記に加え優れた研究成果の創出と、優秀な人材の輩出に励みたいと存じます。

### ケンブリッジ大学だより（相川 光介）

今年の夏は、幸いにも本学の国際交流として、短期間ではありますがケンブリッジ大学の Steven Ley 研究室にて研究に従事する機会を頂いております。Ley 研は有機合成の分野において世界トップレベルでありポストク・院生それぞれ約15名で構成されております。我々の研究室とは全く異なった環境のもと、日々驚きと発見の連続であり、特に世界中から集まった希望に満ちた若きポストクとのディスカッション、プレゼンテーションは私自身の研究に対する情熱をさらに強くしてくれています。帰国後は、三上教授・伊藤准教授のご指導の下、これまで以上に日々精進していきたいと思っています。

## 卒業生から

■ ■ 「世界一のものづくり大国日本！」を本当に実現したい！！

田中 公章（日本ゼオン（株））

昭和52年応化コース、54年修士（森川研究室）

掲げさせていただいた題名は、私の強い思いであります。

思えば、1973年東工大に入学し、その頃も立派で美しかった桜の木の下で「やるぞー！」と密かに心を決めて・・・と書きたいところですが、何がなんだかわからずあつと言う間に3年間で過ぎ、4年生になって活気溢れ且つアットホームな森川研究室にお世話になってから、30年以上が経過しました。森川研究室では、新進気鋭な森川先生や大塚先生に暖かくそれでいて厳しく、手を取るように基礎の基礎から家族の一員のように大事に育てていただき、これもあつと言う間に学部4年時と修士2年間で過ぎ、日本ゼオン（株）に入社して現在に至っています。

日本ゼオンは、もともとは塩化ビニルと合成ゴムの会社ですが、私が入社した（1979年）以前から新規事業の探索を行なっており、私も入社してすぐに研究所の開発チームに所属になり、市場に出す化合物の合成研究を15年強やっておりました。研究段階で確立した技術を持って工場に出張し、成功するまで帰ってこられない「試作」と称した取り組みを何回か行なった経緯があります。工場に行くと研究室での現象とは異なり、期待に反することばかりが発生し、1週間の出張が1ヶ月の長期出張になってしまったことは何度かありました。それでも成功した時に工場の仲間と飲んだ美酒は今でも忘れることができません。

入社して18年で本社に転勤になり、開発営業の仕事を行い、開発した製品を担いで拙い英語で世界中を廻った時に学んだことが今の自分の大きな糧になっています。時期は、1990年代の後半で、日本はバブルが崩壊して元気がなく「失われた10年」と言われ、今から思うと米国は全盛期で、欧州もドイツやイタリア、フランスが活気を取り戻し、一方ではベルリンの壁崩壊（1989年）後の根深い問題がそう簡単には解決されない、こういう状況の時でした。海外で、活気のある会社のエンジニア達といろいろな議論をしました。このような時、私は心の中で「本当に日本のものづくりはなくなってしまったのか？」「日本人の能力は本当に劣るの？」「これからの日本の企業は何をすればよいの？」というような自問自答を繰り返しました。このときの答えは、今でも変わっていません。答えは、「ノー（そんなことはない!）」でした。

この時に感じた、日本（或いは日本人）の良い点は、能力が均一化していて

レベルが比較的高い、単一民族であるが故に目標に向かうという協調性が高い、逆境に強い（辛抱強い）などですが、悪い点は、決断しない、本気にならない、科学技術を取り巻く仕組みが途上である、等々でありました。最近では、日本のこれらの状況は好転しているように思います。産業によっての違いはあるのですが、「ものづくり日本」は本来の軌道に戻ってきていると私は感じています。

最近では、海外の出張がだいぶ減り、海外の仔細はわかりませんが、米国のみ取り上げると、米国の現在の状況が当時の日本の状況に似ているのではないのでしょうか？日本にいと聞こえてきませんが、米国では「工業の空洞化」が深刻化してくるのではないのでしょうか？

「世界一のものづくり大国日本」を担って、リードしていく人材は東工大にあると思っています。大学時代から、あるいは社会に出ても、日々このことを意識するかどうかでだいぶ違うと思います。小学校の社会科で習ったように、「日本は資源が少なく、原料を輸入して加工しないと生きていけない」言うのは真実です。たしか大学に入学した頃に『脱工業化社会』という言葉が話題になったことがあります。今改めて考えてみると、日本にはこの『脱工業化』は起こりえない、ありえないのではないかと感じています。「世界一のものづくり大国日本！」の一翼を担えればと思っています。

## ■ ■ ポスドク生活を振り返って

守谷 誠（名古屋大学エコトピア科学研究所）

平成13年応化コース、15年修士、18年博士（鈴木（寛）研究室）

私は学部から大学院博士課程の6年間にわたり鈴木寛治研究室に所属しておりました。卒業後はドイツのミュンスター大学の Erker 研究室というところで一年間のポスドク生活を送り、現在、名古屋大学エコトピア科学研究所ナノマテリアル科学研究部門に助教として勤務しております。学生からポスドクの間は有機金属化学を専門としておりましたが、名古屋大学



写真：Erker 研究室の仲間達と（左から2番目が著者）

では研究分野がセラミックス材料と一転したこともあり、悪戦苦闘しながらも楽しく充実した日々を送っているところです。このたび、外から見た東工大に

ついで桜花会誌への寄稿を仰せつかりましたので、ドイツに居りましたときに感じたことなどをつづってみたいと思います。

私がポスドク生活を送ったミュンスターはドイツ北西部にある緑豊かで歴史ある都市です。人口は30万人ほどの中規模な都市ですが、そのうち4万人ほどがミュンスター大学の学生という学園都市でもあります。市の中心部には城が残されており、これがミュンスター大学の本部になっています。本部以外の大学の建物の多くは学部ごとに市内に点在しておりますが、私が働いていた有機化学研究所の Erker 研究室は市街地から少し離れた場所にあります。すぐそばには消防署があり、たとえ火災報知器の老朽化による誤報であっても研究所内で報知機が鳴るや否やすぐに消防車が飛んできましたので、安全のことを考えて市街地から離れたところに建てられたのでしょう。

Erker 研究室は学生・ポスドク・スタッフ合わせて30人弱のグループで、私が在籍していた当時のメンバーはドイツ、そして日本と中国から3人ずつ、その他にもスイス、トルコ、イタリア、ロシアからと様々な面々が集まっていました。また、ミュンスター大学と名古屋大学との間で交換留学生のやりとりをしていたこともあり、名古屋大学から博士課程の学生が3か月ほど Erker 研に滞在することもありました。研究室の一日は8時頃（早い人は朝7時には来ている！）にメンバーが集まり、11時半には昼食、そして3時過ぎにコーヒーズをいれ6時過ぎにはほとんどの人が帰ってしまうという具合です。この生活スタイルで、ドイツ人の学生は研究に集中するときはどこに集中し、休む時には休むというメリハリをつけてやっているようです（どうして日本人はそんなに遅くまで仕事をするのか、としばしば不思議がられました）。印象的だったのは、測定機器を管理しているスタッフに博士号取得者が多く、彼らのプ



写真：ミュンスター大学 有機化学研究所（築40年程度で外観、内装ともにどこか南1号館を彷彿させるものがあり、妙に落ち着きました。）



ロ意識が非常に高かったことです。実際、X線構造解析担当のもとにはドイツ国内はおろか国外からも依頼測定が舞い込んでくるとのことでした。ただ、そのスタッフがスキーで足を骨折して3か月入院したときに、測定も3か月間ストップしていたのには驚きました。研究を分業化することで効率を上げようというドイツ的な考え方は納得できるのですが、東工大に居た頃のように自分でできることは人任せにせず自分でやりたいものだ、と母校に思いを馳せることが度々あったのも事実です。

ドイツでは兵役があるため、学生といってもこちらより年上のことも珍しくありません。しかし、学生であろうとポストドクであろうと、研究室では立場や年齢を気にせずにつき合えるのが Erker 研の特徴です。研究室のメンバーが集まり、飲み会やバーベキュー（ひたすらビールとウインナーです）が開かれることもしばしばあったのですが、そんなときに必ず話題に挙がるのが、今後の進路をどうするかということでした。ポストドク同士でそんな話をすると、多くが母国には帰りたくないといえます。確かに母国での生活や研究の水準とドイツでのそれを比べると、そのような結論になるのもうなずけます。日本にいた頃にはあまり考えたこともありませんでしたが、帰りたいたいと思える母国に生まれ、兵役を気にすることもなく、質の高い教育を受けることができた自分がいかに恵まれた環境にあるのかということ、ビールを片手にしながら実感させられました。

現在、名古屋大学での研究生活も二年目を迎え、さしたる不便もなく充実した日々を送っているせいか、ドイツでの生活が遠い過去のように思える自分がいます。外から見た東工大という内容には程遠いかもしれませんが、自分を戒める意味もこめてドイツでのポストドク生活を改めて振り返ってみました。

## 同窓会報告

### ■昭和42年理工学部卒業生同期会報告

藤井 靖彦（昭和42年卒 原子炉研垣花研究室）

昭和42年東工大理工学部卒業生の同期会が平成20年7月19日（土）百年記念館フェライトホールにおいて開催された。前回は平成9年、卒業30周年同期会が開かれた。今年は41年目に当たるが、1年遅れの40周年同期会を開こうと、本年2月有志が集まり準備が始まった。

まず、百年記念館を借りるため、それらしきタイトルが必要だろうと、同期会のタイトルは少し大げさに、東京工業大学昭和42年卒業40周年記念同期

会シンポジウム『卒業後40年を経て東京工業大学を考える』とした。同期会の案内文にも「紅顔の青年も還暦を過ぎ、いささか世の移ろいが気にかかるこの頃でもあります。まだまだ元気なわれらがパワーを世のために活用すべく、何を為すべきかなど大いに語る機会を持ちたいと思います。」と大きく書いたが、趣旨はただ集まって、わいわいガヤガヤただ大いに飲みながら語り合おうというものであった。

還暦も過ぎると連絡が大変である。各学科代表を決め、各学科で案内、参加受付をすることにした。連絡がつかない学科もあったが、大部分の学科から卒業生が集まり、合計約100名が参加した。応用化学系卒業生は同窓会桜花会と窯業同窓会合計17名が参加した。また化学工学同窓会からは13名が参加した。昭和42年卒業生は化学工学科が応用化学科か自分でもよくわからないケースもあり、今回は化工・応化系として一つのグループにまとまった。写真は当日の化工・応化グループ参加者である。

同期会は開場の午後3時から5時までの間、挨拶等は全くなし、趣旨どおり「わいわいガヤガヤ」であった。参加者は大いに満足したようで、10年後の再会を祈念しつつ、2次会に流れた。



## 最近の大学から

### ■ 21世紀 COE に引き続き Global COE に参画

碓屋 隆雄（応用化学専攻 教授）

昨年の本誌で一部ご紹介しましたように、本学化学系6専攻（物質科学、応用化学、化学工学、化学、物質電子化学、化学環境学）は、平成19年度あらたに開始されたGlobal COEに採択されました。「Global COE プログラム」は、平成14年度から文部科学省において開始された「21世紀 COE プログラム」の結果にもとづいて、大学院の教育研究機能の充実・強化と世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を支援し、

もって、国際競争力のある大学づくりを推進することを目的とする国の事業です。本学は、化学・材料分野の全国13拠点のひとつとして採択され、平成23年までの5年間、大学院教育の一層の充実をめざすこととなりました。

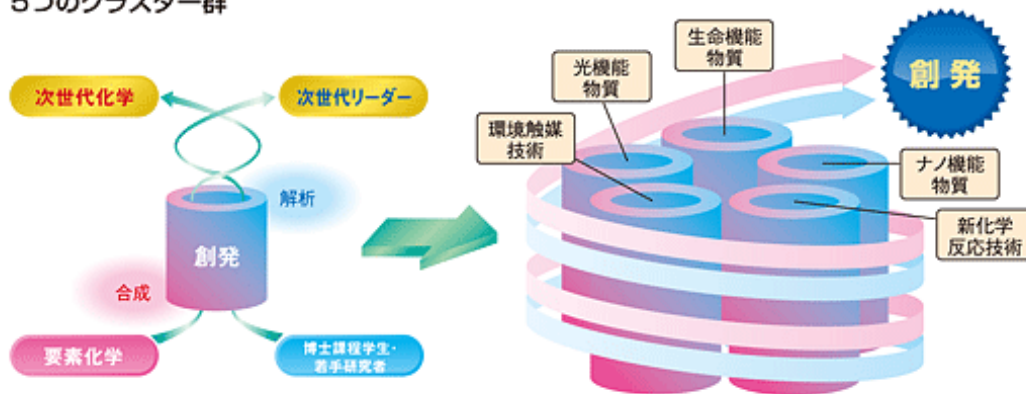
本学 GCOE プログラムは、化学専攻の鈴木啓介先生を代表者に「新たな分子化学創発を目指す教育研究拠点」の形成を主要課題に、世界と真っ向勝負できる新たな大学院教育拠点づくりを目指しております。個々では、プログラムの概要を紹介しますが、詳しくは GCOE ホームページをご覧ください。

今日まで化学の進展は、様々な新現象や新物質の発見、有用な知的資産の蓄積など、学術および技術両面で輝かしい成果をもたらしてきておりますが、一方で、様々な学術分野において過度な専門化という弊害をも引き起こしてきております。このようなゆがみや問題が、さらなる学術の展開や社会の要請への適切な対応の妨げにもなりつつある現状を踏まえて、これらの大学がかかえる諸問題を解消するためには、大学院教育の抜本的見直しが必要と考えました。そこで、本拠点では、異なる要素の相互作用によって質的に異なるものや考え方を産み出す、「創発」、を教育の基本概念とし、化学研究分野における「合成」と「解析」という異なる要素の創発による新しい発想から次代の化学研究を創造し、これを牽引できる若手研究者の育成を目的としております。具体的に、下図に示しますように、背景（合成、解析）、専門分野、年齢や国籍などを異にする人々が動的に相互作用する教育研究クラスター、すなわち、10-20名程度の構成員から成る小さなコンソーシアムを設けます。この場において、教育面では「新融合分野を開拓する次世代リーダーの育成」、研究面では「合成と解



6専攻から構成されるGlobal COE プログラム「新たな分子化学創発を目指す教育研究拠点」のロゴマーク

## 創発を生み出す合成・解析クラスターと5つのクラスター群



析の融合による知の躍進」を目指します。このような化学道場である、クラスターを5つ構築してそれぞれ重点課題「生命機能物質」、「光機能物質」、「環境触媒技術」、「新化学反応技術」、「ナノ機能物質」について教育と研究を活発に推進しております。

それぞれのクラスターには、書類審査と面接により厳正に選抜された大学院博士課程の学生が、年間に相当額の Research Assistant 費の支給を受けて、クラスター内で様々な研究背景をもつ教員や学生とともに5つの重点課題についての活発に討論して、研究者としての基本的能力や資質の修得に努めております。さらに、経済的支援を与えることで研究に対する責任感をもたせるねらいもあります。実際、化学道場の効果は、学生の議論の仕方や研究の進め方等に具体的に現れてきており、楽しみです。

応用化学専攻から、鈴木寛治教授と碓屋がクラスター3「環境触媒技術」に、高橋孝志教授がクラスター4「新化学反応技術」に応用化学専攻代表として所属し、GCOEの研究教育発展のために尽力しております。是非桜花会の会員の皆様からご支援を賜りますようお願い致します。

なお20年度から新たなGCOEが複合領域で理工学研究科平井 秀一郎教授をリーダーとする「エネルギー学理の多元的学術融合」を課題として立ち上がり、本専攻の山中一郎准教授が参画しております。研究教育分野の多様化によって大学の体制も柔軟にかつ適切に対応変化しなければいけません。応用化学専攻の教員も様々な分野に適切にかつ強力に対応してそれぞれの学術分野で貢献できているよい例であります。

GCOE ホームページ : [www.coechem6.titech.ac.jp](http://www.coechem6.titech.ac.jp)

## ■ ■ 「米百俵」の使い方

桑田 繁樹（応用化学専攻 准教授）

戊辰戦争後に困窮していた長岡藩で、支藩から見舞いとして届いた米百俵を皆に配らずに、「百俵の米も、食べばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」として、学校設立の費用としたという「米百俵」の逸話は、2001年の小泉首相（当時）の所信表明演説で有名になりました。その小泉政権下で国立大学が独法化され、大学の収入の大半を占める政府からの運営交付金が毎年1%ずつ削減されることになったのは皮肉な話です。もちろん、ただ交付金を減らすのではなく、国の財政悪化、少子化が進む中で、限られた「米百俵」を、研究、教育に成果が上がっている大学に集中的に投入して有効活用しようという考えに基づいた競争的資金の拡大がセットになっています。幸いなことに、応用化学専攻は東工大の他の化学系専攻とともに21世紀COEプログラム、引き続きグローバルCOEプログラムに採択されるなど、競争的研究資金の獲得状況は良好です。また研究だけでなく、COEプログラムでは大学院生をリサーチアシスタントとして雇用することによって、彼らを教育、経済の両面から支援しています。一方で、このような競争的資金には申請書・報告書の作成、成果報告会の開催などの事務負担がつきものですが、運営交付金と違って競争的資金はあくまでも一時的な資金ですので、事務職員を長期かつ安定に雇用することは困難です。運営交付金の削減もあり、私が東工大に着任した6年前に比べて事務職員の人数はずいぶん減ってしまいました。雇用が流動的になるのは時代の流れなのかもしれませんが、結果として教員、職員にかかる負担は増しているように思います。

この7月末に、運営交付金の年3%追加削減が閣議了解されました。消費税率の議論と同様の安直さを感じましたが、あまり報道もされなかったようです。このままでは早晩、統合再編を含めた抜本的改革を迫られる国立大学法人が出てくるのではないかと思います。政府は兵糧攻めによって個々の大学に改革を促すばかりで、この国には将来、どの程度の能力をもつ大卒者（院卒者、博士号取得者）がどれだけの数必要となるのか、そしてそれを保証するための設備、人材は、どこにどれだけ確保すればよいのか等、国全体としての教育のあり方をふまえた議論が見えてきません。高等教育の将来展望をしっかりと示すことなしに「米百俵」の数字合わせに走るのであれば、医者不足、弁護士過剰などと同様の問題が発生しかねないと危惧しています。

## 桜花会賞受賞者の声

桜花会では毎年、大学院博士課程の学生が選考した優秀な卒業論文発表者に対して桜花会賞を授与しています。平成20年3月の桜花会賞受賞者に、受賞の感想や近況などを綴ってもらいました。

### ◆木村 貴 (碓屋・桑田研究室)

初めまして、碓屋・桑田研究室に所属しております修士1年の木村貴と申します。今回は、僭越にも昨年度の卒業研究発表におきまして桜花会賞を頂き、このような文章を書く機会に恵まれたことを大変うれしく思います。現在は昨年度に引き続き、窒素架橋二核錯体の触媒反応への応用について研究しております。

昨年度は研究室に所属して1年目ということで、初めは研究者としてやっていけるのか不安でいっぱいでした。学部3年生までは授業中心の生活で、周りの友人たちと同じ授業を受け、同じ実験をし、自分は他の人違ってこれが出る、あるいはこれをやりたいといった事を考える機会がほとんどなかったように思います。年度の終盤にさしかかる頃には俄かに研究室所属の話題がのぼるようになりましたが、そこで初めて自分のやりたいことを真剣に考えました。しかしながら特にこれといったことも思いつかず、結局研究分野に一番幅があるだろうという考えで碓屋・桑田研究室に所属することにしました。今思えば、この瞬間から桜花会賞受賞という1年間の期限付きサクセスストーリーが始まったのだと思います。研究室所属はそのようなあいまいなものでしたが、いざ研究生活が始まるとみるみるうちに研究にのめりこんでいくのが分かりました。実験はうまくいかないことがほとんどで、思い通りにいかなかった実験のサンプルはすぐに捨ててしまいたかったのですが、捨てようとする先輩に怒られましたので、根気よく1つ1つの実験を追いかけていきました。しかし気付いたころにはそれが当たり前で、知らないうちに研究テーマは自分のものだという愛着心が生まれていることに気付きました。研究中は、何度も見放そうと思いましたが、このテーマは自分しかやれないのではないかと思うとついつい熱が入ってしまいました。今では単核錯体では見た目にも物足りなさを感じてしまいます(注：あくまで個人的な感情です)。

結局のところ大事なことは、与えられたものでもいかに自分のオリジナリティを出すかということだと思います。人は生まれたときから他人を模倣して成長していくわけで、それを自分のものに昇華するところに個性が生まれます。化学でも同様に多くの化合物や反応が存在しますが、それらを理解し、自分の

系へと展開していくことが必要なのだと思います。

最後になりましたが、卒業研究や現在の研究において、篤くご指導して頂いた碓屋先生、桑田先生をはじめスタッフの皆様、研究室の仲間感謝したいと思います。本当にありがとうございました。そしてこれからもよろしくお願いします。

#### ◆平木 大介（和田・山中研究室）

まず、先日行われた卒業研究発表会において桜花会賞をいただいたことに、改めて感謝申し上げたいと思います。

私が和田・山中研究室に所属して早一年が経過しました。同じ時期に和田教授が着任され、新たに和田・山中研として運営していく初動の時期ということもあり、前期は研究とは関係ない作業も多く、研究室生活に慣れるまでかなり時間がかかった記憶があります。雑誌会や輪講などにおいては、3年までに体験したことのない厳しい雰囲気にもまれ、先生と先輩方の議論に耳を傾けるだけで精一杯でした。また、自分の研究に関しても実験台の組み立てから、実験操作、装置の使い方、廃液の処分方法に至るまで初めてのことが多く苦労しました。しかし、先輩方に研究室のルールから研究に関することまで細かに教えていただき、後期からはようやく研究室の一員としてまともに研究活動に参加できたのではないかと思います。

卒研発表当日は、全体の発表で緊張のあまり予定より1分も早くしゃべり終わってしまい、「へたこいたー」と反省。そのおかげか？後半のポスター発表では自分らしくのびのびと発表できたのが受賞につながったのではないかと思います。ときには先生に厳しく指導されへこんだことや、思うようなデータがとれず焦る日々を送ったこともありましたが、無事卒論を提出し終えた今となってはいい思い出です。

今年からいよいよ大学院に進学し、講義に研究に雑用（！？）と忙しい生活を送っています。早くもだれてしまいそうですが、山中先生の「本番でうまくやろうとしても普段の力しか出せないから、普段からしっかりやれ」という言葉を思い出しながら、残りの学生生活を悔いのないよう過ごしたいと思います。最後になりましたが、一年間ご指導くださった先生方、先輩方に感謝するとともに、研究生活を支えてくれた両親に深く感謝したいと思います。

#### ◆福原 紀一（原研究室）

発表会数日後、なぜ自分がこのような文章を書く立場になってしまったのか理解できないでいました。私の研究生生活では、桜花会賞に興味を注げるほどの余裕も自信も持てない状況でした。

私はもともと人に物事を説明すること嫌いな方ではなかったのですが、大勢の前でのプレゼンテーションとなれば話は別であり、あがり症で本番になると周りが見えなくなる傾向があるため、この私が発表において賞をもらえるという事はまさに「想定外」と感じております。

実は昨年12月から本年2月まで体調を崩して実験が全くできない状況に陥り、卒論発表会本番にすら出られないかもしれないという事態が私を襲いました。そのような事情のため、少ない蓄積データからの資料作成だけで頭が一杯であり、それ以外の事に関心を向ける余裕はありませんでした。卒論発表会への参加すら危うかった私にとって、桜花会賞なんて夢のまた夢だったのです。

このような状況にもかかわらず、私が無事に参加できたばかりか「想定外」の賞まで頂けたのは、この1年、特に直前の2ヵ月半に力強く私を励まし指導して下さった原亨和教授、厳しい添削とディスカッションでスライドとポスター制作を助けて下さった加藤英樹講師、中島清隆助教、そして応援してくれた研究室の先輩と同期の皆さんのおかげです。この文面を借りて改めて感謝の意を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

国道246号線の車列から湧き出る排ガスも、近くに食事処の無いような環境も住めば都。これ以上の研究環境は無いと思える（思い聞かせている？）すずかけ台の地で、今度は2年後の修士課程修了を目指し切磋琢磨していこうと思います。

#### ◆三村 俊介（三上研究室）

はじめに、昨年度の卒業研究発表において桜花会賞に選んでいただきありがとうございました。当日は、まさか自分が選ばれるとは思ってもいなかったため、受賞者の発表があったビアパーティーの中盤には卒研からの解放感もあり、既にずいぶんと酔っぱらっていました。そのため自分の名前が呼ばれた時は本当に驚いたことは今でも覚えています。午前中の口頭発表が終わった後に「桜花会賞、もらったな！」と言って下さった先輩の言葉も、まったくの冗談だと思っていました、すみません（笑）

三上研究室に所属してから約1年経った今、思い返してみると、ありきたりな言葉ですが長くも短くも感じられる1年間でした。学部の3年までは部活中心の生活を送っていた自分にとっては4月から始まった研究室生活は驚きの連続でした。有機合成系の研究室に所属するからにはある程度の覚悟はしていましたが、やはり最初は生活の激変ぶりに戸惑ったこともありました。

特に12月に研究テーマを変えた自分にとっては卒研発表前の1ヶ月は本当に(地獄のように)厳しいものでした。しかし、そんな時に励みになったのが卒研発表の直前にあった修論やD論で必死に頑張っていた先輩たちの姿や、一緒



に苦勞した同期たちの存在でした。先輩達の「あと少しだから頑張ろうや！」といった励ましや、同期での苦勞の分かち合いがあつてこそ乗り切ることができたと思います。

発表の2日前まで実験をしていた自分は前日しか発表の練習をすることができませんでした。その1日の練習量だけは誰にも負けていないという自信があります。(練習のしすぎでスランプになって、研究室内でのリハではまったくしゃべれなくなったという笑い話もありました) リフレッシュルームに集まり同研究室の B4 の4人で必死になって練習したのは、嘘偽りなくいい思い出です。そんなちょっとした努力と幸運が重なった結果、自分が三上研 B4 の代表として受賞したと思っています。

ずいぶんと恥ずかしい文章になってしまいましたが、最後に三上教授を始めとした三上研のメンバー全員、特に最後の最後まで直接指導していただいた相川助教に厚く御礼申し上げます。修士となったこれからも、後輩指導を含め頑張っていきたいと思っています。

#### ◆宮里 遼 (池田研究室)

まず、卒業研究発表におきまして桜花会賞をいただきありがとうございました。去年の3月に池田・宍戸研究室への配属が決まってから早1年が経ちました。卒業研究を通して私が一番学んだことは、“人と人とのつながり”です。私自身、この一年間を先輩やスタッフの方々に助けられ続け過ごしてきたと感じています。初めて行う実験操作や、慣れない資料作成といった細かい作業まで、すべて先輩に教えていただきました。また、研究室という集団の中、共同生活を送る上では“思いやり”が最も欠かせないことも学びました。研究を成功させる秘訣は人と人とのつながりであり、より多くの人と関わり合う程大きな利益を得ることができると感じています。

先日、すずかけ台キャンパスにおいて白川英樹先生の講演会がありました。公演後の質疑応答にて、池田先生からの「小中学生の理系離れについて白川先生はどうお思いですか」という質問に対し、白川先生はこう答えていました。「全員が理系の人間になってくれとは思いませんが、子供たちには是非とも“自然”をみてほしい。“自然”から学べることはたくさんある。学校に行つて授業をうけるという受動的な姿勢だけでなく、自主的に、自由に考えるということを学んでほしい。」世界との競争に勝たなくてはならない状況の中、革新的な発見をするには、自由な発想を生める環境をつくり出す必要があるそうです。ノーベル化学賞を受賞された方からの貴重な言葉に、私は大きく感銘を受けました。

今後の私の目標は“挑戦”です。研究内容をはじめとして、趣味や課外活動

などにおいてもさまざまな挑戦をしたいと考えています。そのためには、周りの人との助け合い、意見の交わし合いが不可欠となると思います。また、自主的行動なしでは挑戦とは言えません。今までは、自分の能力では達成できないことには挑戦しなかったのですが、今後はさまざまな分野へ視野を広げ、出来る限り上を目指しながら研究に励もうと思います。

最後に、卒業研究発表制作に際してお世話になりました、担当教員である池田富樹教授を初めとして、4年間御指導いただきました応化コースの先生方、同研究室の教員方や先輩方、共に切磋琢磨してきた同輩に心から感謝致します。

#### ◆宮本 起孝（佐治研究室）

昨年度の卒業研究発表の際に桜花会賞をいただき、本当にありがとうございました。私のような人間がこのような賞をいただけたのも、佐治先生、荻原さんや研究室の先輩方が、理解力の遅い私に丁寧にご指導下さったおかげだと思っています。心からお礼申し上げます。

卒業研究発表の当日は緊張のあまり十分に眠れず、睡眠不足のために軽い興奮状態にありました。しかし、自分の番が近づくにつれ動悸が激しくなり、今まで感じたことのない程の緊張に包まれました。口頭発表の4分間はあっという間で、正直このときのことはよく覚えていません。おそらく記憶にないので、大きな失敗はしなかったのだろうと思います。

1時間のポスター発表も、緊張のためによく覚えていません。質問していただいた方々に、夢中で説明していたような気がします。この1時間もあっという間のもので、終わった時には一気に全身の力が抜けた気がします。

その後の、桜花賞受賞者の発表の際に、一番初めに自分の名前が呼ばれた時は、その場にいた全員が驚いていました。まさか宮本がとるとは、ということだと思います。当然のことです。本人が一番ありえないと思っていましたから。驚きのあまり一言を求められても1分くらい沈黙してしまい、その後何かしゃべった気もするのですがよく覚えていません。ただ、今まで生きてきて、賞をいただくということがはじめてだったので、心から嬉しかったです。

卒業研究が終わり、振り返ってみればあっという間の一年でした。これからの大学院生活では、昨年の反省を生かし、もっと時間を有効に使い、さらに研究に精進していきたいと思います。そして、卒業するまでに何かしら研究室に残し、それが後輩たちへの道標になればいいと思います。

## 桜花会総会・工大祭企画のご案内

今年度も工大祭にあわせて桜花会総会と各種企画を開催いたします。桜花会会員の皆様には、ぜひこの機会にご来学いただき、旧交をあたためるとともに、学生や教員とも交流を深めていただければと存じます。

工大祭桜花会企画では講演会ののち、研究室開放、ポスター展示を予定しております。また、本年度も卒業生による企業説明会を開催する予定です。ご協力いただける会員の方は桜花会事務局までご連絡いただけますと幸いです。

なお企画の詳細につきましては桜花会ホームページに掲載いたしますのでご覧下さい。準備の都合上、ご参加いただける方は、1. ご氏名、2. 総会の出欠、3. パーティーの出欠を桜花会事務局まで事前にお知らせいただけますと幸いです。

### ★★★桜花会総会・講演会など★★★

日時 10月25日(土)

13時-14時 総会

14時-15時 講演会 田村吉隆氏 (森永乳業株式会社)  
「育児用粉乳の改良と膜分離技術について」

15時-16時 OBによる学生向け企業説明会

終了後 ビアパーティー (会費 2,000円を当日会場にて申し受けます)

場所 東京工業大学 大岡山南1号館 2階209会議室

### ★★★研究室開放・ポスター展示★★★

日時 10月25日(土)、26日(日) 11時-17時

場所 東京工業大学 大岡山西4号館 2階学生実験室

### 卒業祝賀会のご案内

平成21年3月26日(木)予定

詳細は後日桜花会ホームページ、

電子メールなどでご案内いたします。

## 会員の声

桜花会では毎年郵便振込にて会費納入をお願いしておりますが、その振込用紙の通信欄にご近況などをお書きくださる会員の方が結構いらっしゃいます。事務局だけで楽しんで(?) いるのももったいないと思い、いくつかのメッセージをここでご紹介したいと思います。振込の際にはどうぞ一言お書き添えいただければと思います。

**内田 盛也** (旧制 博士) (財) 日本学術協力財団理事、(社) 日本工学会顧問、(社) 先端技術産業戦略推進機構顧問、(学) 日本工業大学顧問、などボランティア的活動を行っています。

**小林 盛** (S3 学士) おかげ様で平穩無事に日々を送っています。

**高島 直一** (S14 学士) 夏バテ状況。

**植田 賢一** (S14 学士) 94 才、まだ歩いています、姿勢を正そうとするので背中が疲れます。

**佐沼 秀俊** (S19 学士) 老人ですが一応元気。

**山崎 升** (S20 学士) 当方 86 才にして元気。

**奈良場 恒三** (S21 学士) 元気です。

**宮坂 伊兵衛** (S21 学士) 家業の日本酒・味噌の醸造業に従事して 60 年、馴れぬ微生物に囲まれて、その伝統技術の自動化の完成を夢見乍ら、今だに奥深い未知の世界を迷っているこの頃です。

**西山 徳三** (S22 学士) 定年後に始めた会社 ((株) 人材活用センター) が 25 周年を迎え、朝だけ出勤しています。

**滝澤 章** (S26 学士) 元気です。

**市川 惇信** (S33 博士)

[www.a-ichikawa.com](http://www.a-ichikawa.com) をご覧ください。論説を載せています。

**小谷野 和郎** (S33 修士) 先日、構造生物学国際シンポで発表などしました。

**神力 喜一** (S34 博士) 妻と二人だけの

生活、まあ一気です。

**山本 克行** (S34 学士) 長期目標 : 125 歳まで生きる。中期目標 : 環境保護や発展途上国への支援等 (略) 短期目標 : 東京マラソン参加 (抽選で当たる事を願っている)。

**野村 嶺** (S34 学士) 元気でゴルフなどやっています。

**齊藤 正巳** (S41 修士) 東レフィルム加工 (株) 製品開発部に嘱託勤務中です。

**栗原 重紘** (S44 修士) I S O 14001 講師をやっております。

**長谷川 欣治** (S46 修士) 帝人岐阜事業所にいます。

**相澤 益男** (S46 博士) 学長を任期満了で退任し、内閣府総合科学技術会議議員 (常勤) として、科学技術政策の舵取りに専念しております。

**橋本 恵一** (S47 修士) オランダ駐在中。

**谷口 功** (S50 博士) 熊本大学工学部長・教授、蔵前工業会熊本県支部支部長

**武田 良幸** (S61 修士) 娘が来春は高校受験、自分も年をとったなあ、とつくづく思う今日この頃です。元気にやっています。

**伊坂 晃** (H8 修士) 群馬大学医学部付属病院救急部に勤務。

**稲垣 昭子** (H10 博士) 資源研にいます。

**榎本 博之** (H11 学士) 栗田工業(株)にて水処理装置に関する開発を担当しています。

## —あとかぎ—

ヒートアイランドなのか地球温暖化かなのか、ここ数年の夏の暑さには身も心もまいっております。そんな中でも学生さんたちは一所懸命に試験勉強に励んでおります！というのも、以前とは違って期末試験が夏休み前に行われるようになったためです。大学院の入学試験も8月19日から21日にかけて行われており、学生達だけでなく教官側も暑いからと云々のんびりとはできません。これまでは、何となく「夏休み」というモードで過ごしておりましたが、大学の行事の中でも意外と8月が忙しい月だということがわかってまいりました…。その忙しい合間を縫って原稿を完成させていただいた皆様のおかげで、本年もなんとか工大際に間に合う形で桜花会誌を発行することができました。編集一同ほっとしております。どうも有難うございました。これで私も夏休みに入れます!! (T)

平成 19、20 年度桜花会事務局

〒152-8552 東京都目黒区大岡山 2-12-1-S1-6

東京工業大学 大学院理工学研究科 応用化学専攻 鈴木寛治

電話 03-5734-2148 Fax 03-5734-3913

E-mail: [cherry@apc.titech.ac.jp](mailto:cherry@apc.titech.ac.jp)

桜花会ホームページ <http://www.apc.titech.ac.jp/~okakai/>